

# 教育研究業績書の記載上の手引

## 1、教育研究業績書（著書、学術論文等）

- (1) この書類は、担当授業等に関連する著書、学術論文等（ただし客員教授・非常勤講師については担当科目分のみで可）について記入する。（投稿予定及び口頭発表は、「3. 教育研究業績書（学会および社会における活動等）」の書式に記入する）なお、発行または発表予定のものは、その旨を明記するとともに、必ず発行元あるいは学会等の受理証明または発行証明を添付する。
- (2) 「著書、学術論文等の名称」欄は、Ⅰ「著書」、Ⅱ「学術論文」、Ⅲ「その他」に区分し、その区分ごとにそれぞれ年月日順に記入する。なお、「その他」には学術報告書、教育実践報告書、書評、学会時評などが含まれ、それぞれ項目を立てて示す。
- (3) 「学位論文」は、修士・博士論文について、その旨明確になるよう、Ⅱ「学術論文」の中に記載する。
- (4) 「概要」の欄には、著書、学術論文等の概要について、それぞれ200字程度で記入する。
- (5) 著書・学術論文、その他は、執筆の関わり方に応じて、単著・共著・共編・共編著・分担執筆に分ける。共著・共編・共編著とは、共著・共編・共編著者として出版物の表紙に記載されるか、奥付にその旨明示されている場合とする。論集やモノグラフに掲載された個々の論文は著書としない。翻訳も斯界に寄与する学術性の高いものは著書に併記する。編者のいる出版物の一章や一部分を担当した場合や、辞書の項目を担当した場合は、分担（執筆）とする。  
共著・共編・共編著・分担（執筆）の場合、「概要」欄に執筆担当したページを明記するとともに、編著者・分担執筆者全員の氏名を、当該著書・学術論文等に記載された順に記入する。  
ただし、共著者や分担執筆者が多数の場合は、「本人ほか何名」とする。
- (6) 発表学会誌等はその名称のほか、巻、号、ページ数とともに「発行所、発表雑誌等または発表学会等の名称」欄に記入する。
- (7) ワープロ・パソコンで業績書を作成する場合、2ページ以降は、年月日・氏名・捺印の欄を省略できる。ただし、ページは必ず1/3、2/3、3/3などと打つ。

## 2、教育研究業績書（芸術、体育、その他）

前項「教育研究業績書（著書、学術論文等）」のⅢ「その他」に該当しない業績をそれに準じた記入要領で記載する。

## 3、教育研究業績書（学会および社会における活動等）

本人の専攻、研究分野に関連した口頭による研究発表（口頭発表）、組織運営、所属学会などを項目別に記入する。

教育研究業績書記入例

(様式その2-1・2関連)

(1/12頁)

教育研究業績書				
(著書・学術論文等)				
平成 年 月 日				
氏名 田中一郎・				
著書・学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
I. 著書 (1) 半導体工学	共	昭和46年10月	岩山出版	半導体デバイス、とくにサーミスタ、バリスタ、光電セル、トランジスタの諸性質とそれらの応用につき記述したのち、それらの背景をなす半導体物性をのべた書物である。 P. 209—P. 387執筆。 山田文介、田中一郎、鈴木啓一、清水太郎共著。
(2) 熱電半導体	共	昭和48年7月	共立書店	半導体の電気伝導、熱伝導、熱電効果の基礎理論、上記諸特性の測定法、熱電変換理論と熱電半導体および熱電変換装置の実際につき記述したものである。 第1編3章 熱電発電(P. 109—P. 153)および全般にわたる編集、検閲を担当。 加藤雄一、中村正光、田中一郎他13名共著。
(3) 電子材料	共	昭和56年1月	三省書店	原子、分子を含め、電子材料に関する諸特性—熱、弾性、電気、光、磁性等の諸特性—につき解説、および物性諸表をまとめたものである。
(4) ソリッドステート回路	単	平成2年7月	山田書房	半導体電子回路の基礎から設計に至るまでの分野を、回路の基礎、半導体素子と部品、機能回路と設計に大分類して解説したものである。
II. 学術論文 (1) 半導体の熱電現象とその応用	単	昭和37年3月	博士学位論文 (東西大学)	各種金属のセレン化物・テルル化物の電氣的・熱電的・熱的性質を測定し、すぐれた熱電冷却材料を探求した。また熱電素子対の作製プロセス、熱電冷却特性、熱電装置の製作の研究をまとめた論文である。
(2) CdSeの結晶構造と物理的性質	共	昭和41年3月	日本電気学会誌 Vol. 24, No. 3 P. 113—P. 132	CdSe薄膜の作製条件により、CdSeの結晶構造が閃亜鉛型とウルツ石型に分れること、またこれに伴ない電氣的・光学的性質が異なることを示した。 P. 113—P. 132執筆。 田中一郎、小泉泰次、向井貞夫、共著。
(3) 半導体による熱電冷却装置	共	昭和58年4月	冷凍 Vol. 31, No. 341 P. 306—P. 354	熱電冷却に関する総合報告と、これに研究室における成果を加えた論文である。 共同研究につき、担当部分抽出不可能。 多田裕、田中一郎 共著。
(4) 熱電冷却	共	昭和60年10月	応用物理 Vol. 25, No. 10 P. 426—P. 431	Bi <sub>2</sub> Te <sub>3</sub> とBi <sub>1</sub> Te <sub>2</sub> の組合わせによる熱電素子対による冷却実験の結果を記述したものである 実験全般を担当、菅は指導。 田中一郎、菅文典 共著。
(5) 熱電冷却展望	単	平成4年5月 (発行予定)	日本電気学会誌 Vol. 26, No. 6 P. 215—P. 228	熱電冷却の状況を、研究の歴史から、冷却理論、材料の最適設計・選定、実験の進行等につき記述したものである。
III. その他 (1) テルル化蒼鉛による熱電冷却 その2: Bi <sub>2</sub> Te <sub>3</sub> の熱伝導率	単	昭和54年2月	東京理科大学工学部研究報告 Vol. 3, No. 2 P. 45—P. 51	Bi <sub>2</sub> Te <sub>3</sub> の熱伝導率を100～400Kの間で測定した結果を記述したものである。
(2) 太陽エネルギーの利用	単	昭和61年1月	日経サイエンス 1986、1、P. 62—P. 66	太陽エネルギーとその利用価値、各種の方法・形態について論述したものである。

著書・学術論文等の名称	単著、 共著の 別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
				<p>複数枚に記述がわたる場合は、 記名・捺印の欄を省き、適宜複写して 用いて下さい。</p> <p>また、この紙の右上の（ / 頁）は、 様式2-1，様式2-2，様式2-3 ごとに、別々に振って下さい。</p>